新選組事件帖

佐木隆三

文春文庫

文春文庫

新選組事件帖

定価はカバーに表示してあります

1990年7月10日　第1刷

著　者　佐木隆三

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-721512-8

江苏工业学院图书馆
藏書章

新選 綱事帖

佐木隆三

目次

池田屋の殺戮　7
蛤御門の奮戦　42
近藤勇の帰郷　76
血飛沫の海峡　113
草莽の炎拡がる　146
粛清の嵐　180
獄舎の奇兵隊長　213
新選組西へ　246
征長軍の敗退　277
最後の将軍　307
近藤勇の涙　339
あとがき　371
参考文献　374
解説　古川　薫　377

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新選組事件帖

単行本　昭和57年3月文藝春秋刊（「新選組」改題）

池田屋の殺戮

旅籠池田屋は、三条小橋の西にあって、主は惣兵衛という。長州の出らしいが、いつごろからの稼業かは、ちょっと聞いていない。いずれにしても長州藩士の定宿であることは、確かなのである。

その証拠に――。

高瀬川にかかる小橋の袂から、文三郎は池田屋を見た。約三間半の間口で、二階は紅柄格子である。

新選組が踏込んだのは、三日前の六月五日夜だった。局長の近藤勇が、「旅舎改めである」と声をかけて入ったら、帖場に居た惣兵衛が仰天した。二階では長州藩士らが三十人ぐらい、酒宴の最中だったのだ。むろん連中は、酒を飲む目的で集まったんじゃない。

六月四日の早朝に、四条木屋町の枡屋喜右衛門が、新選組の壬生屯所へ連行された。薪炭商の枡屋を継いだ喜右衛門は、じつは近江の郷士古高俊太郎であり、長州の激派に呼応している。

ひどい拷問を受けるにきまっているので、戦術戦略をバラす可能性がある。その対策のために集合して、古高奪回作戦を、協議中だったらしい。

「近藤が三十六人斬りやて？」

「荒木又右衛門じゃあるまいし、ムチャクチャ言うたらあかんよ」

三日経ったのに、まだ見物人が絶えない。文三郎も野次馬に混じって、池田屋を遠まきにしているのだ。

六日は祇園祭の宵宮で、七日は本祭りだった。

文久三年（一八六三）八月十八日の政変により、長州藩は禁裏守護の役目を解かれた。天皇を京都から大和へ移し、新政府を作ろうと策動したのだから、やむをえない。しかし長州が黙って引っこむはずはなく、いつ戦火に見舞われるかと、人びとは戦々兢々と過ごしていた。

そんな矢先に、池田屋騒動である。新選組は恐いが、よく考えれば頼母しい。とりあえず治安は保たれたわけで、祭りはなかなかの賑いだった。

「ほんまの話、どれくらい斬ったんやろ」

「人数は分らんけど、大物が混じっていたらしいなあ」

「大物いうたらだれや？」

聞いていて文三郎は、ウズウズしてきた。自分が知っていることを、話したくてしようがない。

これまで確認出来たのは、急を聞いて駆けつけた連中を含め、中で五人殺し、外で十一人殺

した。計十六人を殺し、捕縛したのが二十人余り。これは新選組として、画期的な戦果である。戦闘が終ってからも、残敵掃討の探索をしたため、屯所へ引揚げたのは、正午近かった。

赤穂浪士が討入りを終えて引揚げるとき、沿道は黒山の人だかりだったそうだが、それに匹敵する熱狂ぶりではなかったか。文久三年二月に京都入りしていらい、壬生浪人として冷ややかな目を向けられていたのも、内部抗争を繰返したからだ。八月十八日の政変以後は、公けに市中取締りを命ぜられながら、どうもパッとしなかった新選組の晴れ姿だった。

「あのな……」

たまりかねて、文三郎は二人連れに言った。いずれも職人風で、二十歳そこそこだろう。

「宮部鼎蔵は知っとるだろう」

「へえ」

染物でもやっているのか、手が紫色に見える男が、ひょろりと背の高い文三郎を覗きこんだ。

「宮部さんていうたら、どちらの宮部さんどすやろ」

「肥後の宮部鼎蔵といえば、諸国の勤王家で知らぬ者はおらぬわい」

「……」

二人は顔を見合せ、困惑した様子である。そこで文三郎は、言わずもがなの説明をした。

宮部鼎蔵は、肥後益城郡の医者の家に生まれたが、兵法を学ぶのが好きで、山鹿流を研究した。三十歳のころ伯父の養子になり、熊本藩に召出された。しかし嘉永末期に暇をもらい江戸へ出て、奥羽方面を旅して兵法を研鑽し、肥後へ帰ってからは皇朝の古典に没頭した。文久三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年に上京し、諸藩から集まった朝廷の親兵三千人の総督になったが、政変により七卿と共に長州へ逃れた。そして元治元年（一八六四）、ふたたび京へ現われていたのである。

「どうだ大物だろう」

「へい」

「ほかに吉田松陰の愛弟子（まなでし）の、吉田稔麿（としまろ）も居たぞ」

「斬られはった？」

「もちろん」

その模様も、語って聞かせたいところである。ただ気がついたら、人だかりが出来ていた。物見高いのは、江戸っ子とはかぎらない。

「いずれにしても長州は、当分動けんだろうな」

言い置いて、首筋の汗を拭きながら、西のほうへ歩いた。

大橋をはさんで三条通りは、道の両側はびっしり旅籠である。右側を見れば、高瀬川べりから、亀屋嘉兵衛、中屋作兵衛、池田屋惣兵衛、みすや市兵衛、十文字屋平兵衛、編笠屋八兵衛、ふで屋伊助、大津屋吉兵衛、吉岡屋弥吉……と数えきれない。

いずれも間口は三、四間で狭いけれども、これは京都の建物の特徴で、奥行きがある。池田屋の裏あたり、以前は高瀬川から入舟（いりふね）したというが、今は建物でふさがれている。集まっていた連中は、逃げ道がなく困ったことだろう。

「こりゃ血の匂（にお）いだな」

文三郎は吸い寄せられるように通りを突っ切り、池田屋の入口へ近づいた。左は板壁で、右は格子窓だから、帳場にちがいない。表戸の前には縄が張られ、町方役人が廂の下でぼんやりしている。

「ご苦労さん」

声をかけて格子に顔を寄せたが、ここからは何も見えない。異様な臭気だけ、ただよってくる。

「……」

役人が、ジロリと見た。蓬髪の文三郎を、異様に思ったのかもしれない。

しかし構わずに、縄に触れずに頭だけ日陰に入った。

「暑いねえ」

五月は雨が多く、二十日過ぎに何日か晴れたものの、また雨が続いて、六月に入って降ったりやんだり、五日ようやく晴れて午後に小雨がパラついた。六日宵宮、七日本祭りと晴れて、華氏九十度だった。きょう八日もまた、猛暑だろう。

「こう暑くては腐るのも早い。死骸はぜんぶ片付けただろうね」

「あらかた済んだよ」

四十半ばの役人は、表戸にもたれかかって、面倒くさそうに答えた。

死骸は六日朝から、奉行所役人が検屍した。腕がごろんと転がったり、飛び出したはらわたがうねっていたり、文字どおり足の踏場もなかった。首実検といっても、人相書きは揃ってい

ない。血糊がついたザンバラ髪が顔に巻きついているのを、池田屋の主人や従業員に確めさせ、名前を問うてみた程度だ。それが終って、四斗樽に入れたのを、縄手三条下ルの三縁寺に運んだという。

「三縁寺じゃ葬いを出すのかな？」

「まだ本堂わきに置いてあるらしい」

「わあっ、たまらんな。もう腐りはじめてるぞ」

「そやろなあ」

役人がニッと笑った。この暑さのなか、見張りをさせられて、退屈していたのだ。

主の惣兵衛は、検屍が済んだあと、捕縛された。本祭りのさなか奉行所で尋問され、六角牢に放りこまれている。家族も連行されたが、町役人預けでおさまるらしい。

「京の夏は、どこよりも暑いぞ」

「ふーん」

「三縁寺の死骸は、もう蛆がわいて、これぐらいになってるだろう」

文三郎は、拇指と人差指に五分くらい、隙間を作ってみせた。

「あれは死んだその日に、卵から蛆がわく。江戸では真夏に、五日間ぐらいで成長して、蛹になるからね」

「サナギ？」

「これが五日ぐらいで、殻を残して飛び立つ」

「ほう」
「卵が孵化して蛆がわき、これが蛹になって飛び立つまで、江戸じゃ十日かかる。ところが京の夏はくそ暑い。まず六、七日で飛び立つようだ」
「飛ぶいうと？」
「蠅にきまってるわい」
「ハエかあ」
額と頬骨が突き出た顔をゆがめて、役人は苦笑した。そして思いついたように、顎を引いて目配せする。
「入ってみるか？」
「ありがたい。中が見れるんだな」
「ちょっとだけ……」
「はいはい」
ひょいと長い脚で縄を跨ぎ、役人が開けてくれたくぐり戸を、素早く通り抜けた。
「うっ」
閉めきっているので、臭気がものすごい。帳場の出格子からさしこむ明りで、だいたいの様子は分るが、それにしても修羅場だ。足元などぬるりとして、血を洗い流してもいない。
入口を背に立つと、正面は三畳ほどの式台である。左手は板戸の物入れだが、戸はへし曲がって、槍で突いた跡が見られる。右手は帳場と私室になっており、中仕切りを押して入ると、

炊事場なのだ。
「こりゃすごい」
炊事場においても、斬り合いがなされたらしい。最後には、このへんのものを手当り次第に投げたらしく、鍋釜はもとより、膳や椀が散らばっている。
「あっちが中庭」
「ふむ」
文三郎は炊事場を通り抜け、石燈籠のある中庭へ出た。
ここは奥行きが一間半ぐらいである。幅は三間だが、便所もある。この狭いところで、永倉新八や沖田総司が待ちかまえて、二階から飛び降りてくるのを、斬りまくったという。土間の奥へ廊下が続いて、左側に前の間、中の間、奥の間と続いている。右側は浴室、洗面所、便所になって、裏は池のある庭で、土蔵がある。
「このへんに隠れた奴も居るだろうな」
「へへへへ」
役人が首をすくめて、廊下の壁を指さした。見上げたら天井に近いあたり、にぎりこぶしぐらいの黒い虫が這っている。
「なんだい？」
「これや」
鬢のあたりぺたぺた叩くので、あっと思った。頭の一部を削ぎ取られ、飛んで行ってくっつ

いたらしい。

「うーん」

ぞっとして、汗も引っこんでしまいそうだ。しかし文三郎としては、戦闘の跡も生なましい現場を、今のうちに見ておきたい。

「二階もいいかい？」

「いいよ」

廊下の奥が階段になって、二階の客室に通じるが、ここは引返して入口からやりなおそう。

ぬっと現われた新選組局長が、「旅舎改めである」と言ったら、式台の惣兵衛は腰を抜かさんばかりに驚いて、「お二階の皆さま御用改めでございます」と大声をあげた。ただならぬ気配に近藤は、無言で惣兵衛を張り飛ばし、ダーッと駆け上った。

「狭いな……」

幅半間の階段を昇りながら、文三郎は首をかしげた。

惣兵衛の大声は聞えたが、何を言ったのか分らない。そこで一人だけ、様子を見るために降りて来た。近藤はいきなり、二尺三寸五分の長曾禰虎徹を抜いて、眉間からバッサリ……というけれども、これじゃ狭すぎて無理だ。

すると階段を昇る前に、抜刀していたのかもしれない。不逞の輩は召取って連行するが、手に余れば斬捨てて構わないとされている。近藤は相手が降りて来るところを、ぶすりと突いたのだろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com